

## オープン カレッジ

現在、若者たちによる自己表現の方法として、スマートフォンで作成した短時間映像をソーシャル・ネットワークキング・サービス(SNS)へアップロードする、といったスタイルが定着している。こうした方法は一時期、行き過ぎたふるまい(「バイトテロ」など)により社会的に負のイメージを伴った認知もなされてきた。しかし現在では、そうした側面がことさら強調されることもなくなってきたようである。

一方で、そうした映像を

### 現代の映像との関わりと文化創造性

いるといえよう。ただし視聴方法は、スマートフォン画面をスクロールしていくことで、短ければ秒単位の長さの映像を次々と切り替えていく、という様式をとる。いわば脊髄反射的に、見続けるか次に進むかを決定しつつあるといった楽しみ方である。このような「鑑賞」行為では、ストーリー性よりもむしろインパクト性といったものが重視され、「いま、ここ」における刺激的な楽しさが追求される。であれば、映像を「製作」する行為においても、その点に価値が置かれることになる。ここでは、以上のような見立てを出发点とし、私たちが実は既に手にしつつあるかもしれない

筆者は映像文化についての研究を行っているが、例えば映画の「製作」ではショット(あるいはそれによるシーン)をいかに生み出し、それら同士をいかにつなぐかが重要となる。映像作品(の評価)とは、こうしたつながりの妙で成立する部分が多い。これはつまり「出来事」をいかに生み出し、それら同士をいかに結びつけるかということでもある。この作業は、実は前述の短時間映像の「鑑賞」と「製作」双方の行為

# 若者が生み出す

## 社会像への期待

「鑑賞」する行為については、若者にとってテレビ番組にかわる、一般性を保持した娯楽として認知されて



日本福祉大学教育・心理学部  
子ども発達学科学校教育専攻教授  
小坂 啓史

い、映像作品・映画を生み出していく文化・芸術的創造力と、それへの期待について述べてみたい。

今日では、多くの人がSNSなどによって日常的に誰かとつながったままの生活をしているといえるだろう。これは、参加の自覚をこよみから喚起することのない、フィクションとも事実とも捉えられないような「関係」の持続、という虚ろな物語を私たちは生きているのだといえる。そ

への創造性に向けたエクササイズを行っており、それに長けた力を備えているともいえる。映画を創り出すことは、新たな社会観や感性の提示、そして既存の閉塞的状况からの解放へと導く可能性を秘めている。私たちの社会は、草の根的にそうした基盤をもちつつあるといえるのかもしれない。

なか・ひろし 映像文化研究、芸術・文化社会学、福祉社会学。武蔵大学大学院人文科学研究科社会学専攻博士後期課程・単位修得満期退学。1971年生まれ。